

「世界自然遺産・知床」等、地域をフィールドとしたE S D活動の改善・充実、及び学校の教育活動全体へのE S Dの波及 ～ 地域に誇りを持ち、地域の持続発展に貢献できる人材の育成 ～

北海道斜里高等学校 校長 中谷 晋二
担当者 齊藤 大助

1 活動の趣旨

知床の豊かな自然環境や独自の歴史・文化が身近にあるがゆえに、生徒はそれらの希少性・重要性への気付きや、それらを持続発展させていく必要性の認識が不十分であることが課題であった。そこで、総合学科への学科転換を機に、地域の豊かな自然を教材とした学校設定科目「知床自然概論」を設定するとともに、特別活動として「史跡発掘体験学習」、地域産業と連携した商業科目「課題研究」等を導入し、地域の教育力を活用している。また、大学との連携を通して地域理解を促す教育に取り組んでいる。これらの実施に当たっては、総合学科の学校設定科目「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」とも合わせて、報告会等の発表の機会を取り入れ、自ら考え、学び、伝え、行動する積極性や表現する能力の育成等、課題解決を目指している。

2 活動計画

- ・学校経営シラバスへのE S D活動推進の明記
- ・ユネスコスクール活動推進委員会による、研究推進・評価（検証）方法等の検討
- ・各教科・科目におけるシラバスの作成
- ・校内研修会の実施（実践の方向性等の明確化）
- ・「目指す生徒像」「身につけて欲しい資質能力」の全職員での共通理解を図る。
- ・3年次学校設定科目「知床自然概論」（4～1月）、異年次混合ゼミ（4～1月）、高大連携プロジェクト（7～8月）、進路学習カタリ場（8月）、知床自然体験学習（10月）、史跡発掘体験学習（11月）、学習成果発表（2月）

3 活動事例

E S Dの実践を通して、全教科・科目、特別活動、課外活動等へつなげ、地域の魅力等への気付きや、地域に誇りを持って情報発信する気概、自ら考え、学び、伝え、行動する積極性や表現する能力の育成を目標とした。

具体的には、環境教育、観光教育、キャリア教育を柱に、① 知床の自然理解に係わる活動、② 高大連携（札幌国際大学観光学部）による観光に係わる学習、③ 「産業社会と人間」・「異年次混合ゼミ」（総合的な学習の時間）による進路、課題解決能力身につけることに係る学習を行った。

①知床の自然理解に係わる活動

(1) 史跡発掘体験学習

1年次生全員を対象に、郷土の歴史や豊かな自然に触れさせ、次世代の担い手としての歴史観や自然観を養う。博物館職員による事前講義を受け、発掘調査現場（チャシコツ岬上遺跡）において、オホーツク文化期の遺構や出土した土器・石器等を実際に見学、発掘体験をする。

(2) 知床自然体験学習

1 年次生全員を対象に、環境保全の意識を高め、畏敬の対象として自然を実感し、野外でのルールを遵守する態度を育成する。事前知識等の講義を実施し知床横断道路付近のポンポロ沼周辺の散策や、サケ・マス孵化場での遡上観察を行う。

(3) 知床自然概論

3 年次自由選択科目（学校設定科目 2 単位）で、世界自然遺産・知床の生物、地質、生態系などの学習活動を行う。外部講師による授業は、斜里町立知床博物館、東京農大、知床ネイチャーオフィス、林野庁北海道森林局知床森林生態系保全センターなどから年間 3 6 時間程度行われる。

② 高大連携（札幌国際大学観光学部）による観光に係わる学習

連携プロジェクトとして、「デジタル観光パンフレット」に取り組み、夏季休業を利用し、知床を訪れた外国人に知床の魅力についてインタビューし、英語による説明文と音声をつけ加え、web 上に公開している。観光英語の授業では facetime を利用した e ラーニングによる語学学習も行っている。

③ 「産業社会と人間」・「異年次混合ゼミ」（総合的な学習の時間）による進路、課題解決能力身につけることに係る学習

(1) カタリ場（NPO 法人による動機付けキャリア学習プログラム）

進路の悩みについて、少人数の班になり大学生が対話型のワークショップを実施しながら、自分の将来を考えるヒントを得る取り組み。1 年次生産業社会と人間の授業で実施。

(2) 異年次混合ゼミ

科目横断的・探究的な学習を通して、自ら課題を見つけ、自ら学び考え、主体的に判断し、課題を解決する資質や能力を身につける。今年度は、歴史文化・英語劇・スキルアップ・合唱・創作・数学・保育の各ゼミを展開。



(知床自然概論)



(知床自然体験学習)



(高大連携プロジェクト)

4 成果と課題

E S D を学校全体で体系的に推進するために、研修を通して教職員の意識改革を図った。先進校視察を重ね、本校独自の教科横断的な学習（仮称：知床学）に関するカリキュラムを作成し、次年度より進める準備ができた。地域コーディネーターの確保と、民間の講師の選定や、地域との連携をより一層強化し、生徒が深い学びにつながるよう意識しながら座学と実学との融合を図ることが今後の課題である。